

“太田さん”有難う

前川文夫・佐藤七郎・佐々木敏雄
清水幸子・原山重明

太田さんの思い出

前川文夫(植物)

太田さんがなんで教室へ入られたのかは私は知らない。多分私が兵隊で中支に行っていた間のことのように。だが、太田さんが来られて、教室は大変なプラスになったことは否定できない。こんど定年で退職されるのは、教室としては大きなマイナスで、できれば特例を作ってもう少しのばしたいと思っているのは私一人ではあるまい。

太田さんは人一倍地味な人柄である。会であれ、人の集まるところにはでたがらない。一寸はがゆい程に控めである。教室には教室会議があって、誰でも出てほしいのだけれどもこれにもめったに顔を出さない。

それでいて、太田さんは人一倍親切な人柄でもある。植物学教室の図書も年々ふえて、その所在に困り、それほど必要でないものは棚の最上段に挙げたり、別室へ持って行ったり、四苦八苦の態たらくであって、分類に関係した書物が得てしてこの厄にあったのだが、それをよく覚えていて、いうとすぐに出してくれたものである。私などは大分そのおかげを被った。今でも感謝しているところである。何の気なしに、話したことについて、二三日するとそれに関連した項目で、数冊の本が揃って出されていて、先ずあつけにとられ、ついでいたく感激したことも二三にとどまらない。

そして太田さんは人一倍規帳面な人である。図書は借りたら返すのが本則であって、だから返済日時を必ず書き込む。ところが申訳ないことだが、時に忘れる、イヤ覚えていてそれで返しそびれていることもある。そういう場合、返済の日付から少し経っている時、何気なく傍に寄って来て、一寸一言、いうのである。それが痛く身にこたえて、アタフタと返しに行ったことも、おはずかしながら何回かあった。こうして教室の図書はよく整頓され、よく活動している。太田さんの地味だが、抜目のない努力がこの図書を全くしていたといっても過言ではない。

今回9月30日で停年退職されることになったときい

た時、以外に速い退職と思ひ込んだ。それ位太田さんは図書以外の事柄には触れたがらないのであった。今後どうなさるのかも知らないが、御健勝を祈るや切なるものがある。

図書守り太田さん

佐藤七郎(植物)

私が田舎の高校から進学してきて初めて教室の図書室を案内されたとき、どういうわけか、そのイメージが神域という感じをうけたのを忘れることができない。重い扉でさえぎられて薄暗い書庫の奥深い静けさ、壁面高く掲げられた歴代教授たちの少々大きすぎて威圧的な肖像画などがその舞台装置だったが、戦時中という時代のふんいきでもあったのだろう。そこで働いておられた太田さんは巫女のようにみえた。

戦争中、欠講が多いころ、私はその書庫の中に閉じ込めることが多かった。文字通り万巻の書に囲まれて好きな本を自由に読めるのは楽しかった。連日空襲におそわれ、いよいよ末期に近づいていた戦争の喧噪からそこだけは完全に隔絶されてあった。聞こえてくるものといえ、太田さんのたたく軽やかなタイプの音と、ときどき書庫に出入りされる太田さんのかすかな気配だけだった。太田さんのタイプの音がしばらくの間止んだときに私はノートを閉じて帰宅の仕度をはじめればよいのであった。本郷地域が一面の焼野になってしまった日にも太田さんはそうして静かに働らいておられたように思う。

戦争が終って教室の中に若い者もふえて少しは賑やかになったころ、植物教室の七不思議というのが伝わったことがある。そのひとつに太田さんのお年があった。当時の先生方はごぞんじだったのかもしれない。けれども若い連中には誰にもそれがわからなかった。20才代とも30代ともそれ以上ともいわれた。ことさらに詮索してこの不思議を解いてしまおうとする者もいなかった。だから私には、2年ほど前、太田さんが近く停年だと知らされて驚くまで、それが不思議のまま残っていた。

太田さんが教室にこられてから、ずいぶん多くの方が太田さんのお世話になっている。教室に來り去った人で

太田さんを憶えていない人はいない。そのことを思うと長い年月が経ったと思う。しかし一方、この間に、太田さんの誰彼のへだてのない心のこもった親切と行届いた完壁のサービスは少しも変らなかつた。それどころか、この間に太田さんはドイツ語、ロシア語、ラテン語を習得して既得の英仏語に加えてサービス領域を広められた。太田さんが欲しがっていたロシア語のタイプライターを備えてあげられなかつたのが図書係りとして長年にわたっているいろと我まをきいていただいた私の心残りである。

太田さんは真底から本が好きで図書のお守りをしておられるようであった。太田さんの勤勉、図書利用者への親切、相手を分けへだてしない言葉遣い、ていねいな図書の取扱い、徹底した参考サービス、そして失なわれた図書への思い遣り、そういったものはすべて太田さんの図書への限りない愛情からでたものであったと私は思う。

うかがうところによると、太田さんは退職後はゆっくりと読書の生活を送るのを楽しみにしておられるとのことである。

太田さんと図書館

佐々木 敏雄 (農学部図書館)

太田さんとの出会いは、終戦後のまもないころ、一利用者として植物の図書室を訪ねた時であった。1800年代の中ごろに出版された隠花植物に関する本のことであったが、太田さんは直ちに、「その本は日本には一冊しかなく、北大の宮部先生がお持ちです。」との答えであり、その広い知識にまず驚かされた。その後もいろいろとお世話になったが、このような人のいる図書室を利用できる植物の研究者を常にうらやましく思っていた。

図書館に関係することになってからは、お世話になったりなれたりであったが、農学部の図書館職員は、理学部植物からの参考質問は、余り歓迎していないようであった。というのも、太田さんが調査されてわからないものがくるので、むずかしい質問が多く、その多くが回答不能であるというのが理由らしい。図書館職員が太田さんから刺激をうけ、勉強になった点ははかり知れない。

大学の図書行政を考えてみると、学科単位の小図書室には多くの問題がある。職員数が1~2名という職場では、病休や年休をとるにも不自由であろう。また研修などは、図書館職員としては不可欠のものだが、出席もなかなかできないであろう。待遇の面でも、係長のポスト

を設けるのも困難で、不利な身分におかれる場合が多い。

太田さんの図書館における業績を考えると、東京大学における図書行政の貧困さが痛感され、早い機会に改革してもらいたいものと思われる。

太田さんお幸せに

清水 幸子 (総合図書館)

「植物の大田さん定年で退職なさるそうよ」「もう定年ですって、髪は薄いけれど、お若いのでその様なお年とは思ってもみなかったわ」

これは或日のお茶の時間の会話です。この事実は私達にとって寝耳に水でしたので、ただ驚くばかりでした。

個人的なお付き合いはありませんでしたが、仕事を通じての大田さんは、親切で、謙遜家で、その反面真の強さをお持ちになり、木目の細やかさを感じさせるお人柄の様にお見受けしておりました。三年位前でしたか、図書館の中でお会いした所「ドイツ語の研修ですの、続けておりませんと忘れてしまいますので」と云うことでした。その一年位前にも一緒にロシア語に出ていた筈なのに、普通の方なら恐らく、もう年なのでと止めてしまうだろうに。この様に地味な積重ねを怠らず、努力と情熱を仕事に傾けていらっしやった姿が目に残ります。

こちらからの依頼に対して、出来得る限り調査して適確なる Information を与えて下さり、一気に話される独特な早口は忘れることが出来ません。

総合図書館の Reference work の範囲が広い為、高度な専門的な分野は、学部図書職員の援助なしには出来ません。特に自然科学を専攻した職員は数名ですので、専門知識 (Librarian としての) を豊富に蓄積していらっしやった太田さんの存在価値は多大でした。図書館学の発展に従って、理論が先行し実際が伴わず、地味な仕事を嫌う人の増えてきている昨今、良き意味でも悪しき意味でも大変貴重な模範であると思っています。研究の蔭の力となった実績は計り知れないものがあつた事とします。又私達も何かと教えられ、反省させられ与えられた影響は大きく、Specialist として非常に惜しまれる数少ない人材であると痛感致してをります。今後の御多幸を祈って。

畏れ多い太田さん

原山重明(植物)

植物学教室図書室の主、太田さんが今月限りで定年退職される。若き日々、彼女に情熱を傾けた古参から、彼女がもう定年の歳である事を知って驚く新参まで、いろいろの感概を持って彼女を送ろうとしている事と思う。日頃から、彼女に世話をかけっぱなしの、なまけもの大学院生が、送別の辞など畏れ多い気がする。だから、何故畏れ多いと感じる様になったのかを、少し書かせてもらおうと思う。

① 僕はドイツ語が全然駄目である。だから、ドイツ語の雑誌のタイトルを、今だに正確に読む事が出来ない。「この……という本(ドイツ語)を借りたいのですが。」と本の名を、英語・フランス語・ローマ字流ミックスに読むと、太田さんは、それを読み直しながらメモを取っていく。(彼女の発音が正確か否かを僕は判断できないが、皆の話だと彼女はドイツ語はもちろんロシア語の勉強もしているのだそうである。) だから僕は彼女にコンプレックスを感じている。

② 毎年、新年のおとそ気分がまださめない時期、図書室に現われた我々は、必ず太田さんの丁寧な新年のあいさつを受ける。品の一かけらもない研究室の雰囲気染ってしまった僕は、その時、失なってしまった礼を想い出す。そして、折目正しい彼女に、生れか育ちか知らないが、そんな差を感じている。

③ 一度、1800年代の論文を読まなければならない破目に追いこまれた僕は、それを捜しに図書室に行った。そして、その本が、植物学教室蔵書としてあった事に驚ろかされたが、それよりも、その本を、太田さんが、狭い空間の中にうず高く積まれた本の山の中からすぐ見つけ出してきた事にはもっと驚ろかされた。見かけの雑然性と能率性と必ずしもパラレルでない事を彼女に知らされた思いがした。

くだらない事で紙を使い果してしまった。畏れ多い太田さんが去ってしまわれたあと、我々は多くの不便に直面する事と思う。しかし、その不便解消の努力を新しい司書の方一人に負わせる事なく、皆の知恵と協力で、新しい、一層便利な図書室づくりをしていかねばならないと思う。